

前回は触れましたが、最近、極端な気象が頻発しています。8月末には記録的な集中豪雨により、広島市で大規模な災害が発生したほか、北海道でも礼文町で大きな被害が出ました。札幌管区気象台が発表した北海道の「2014年夏の天候」によると、今年は5年連続の「暑夏（気温が平年差+1.3℃）」で、4年ぶりの「多雨（降水量が平年比142%）」でした。特に8月のオホーツク海側では、雄武、紋別で統計開始以来第1位、網走では同第2位の降水量となりました。

▼北海道の水産業は自然の海を生産の「場」としていることから、気象や気候の変化が海洋や漁場の環境に及ぼす影響を注意深く把握し、その変化に順応的に対応していくことが重要です。オホーツクの太宗漁業である地まきホタテガイ漁業についても、昨年の特異的な例（貝柱の大型化、高歩留まり、高グリコーゲン含量）にもみられるとおり、採苗や放流後の生残・成長、貝毒の発生など、ホタテガイの生産や出荷は海洋や漁場の環境に大きく影響されます。

▼このうち貝毒に関しては、オホーツク海沿岸では数年に一度、夏季に有毒渦鞭毛藻 *Alexandrium tamarense* (以下、At) を原因種とする麻痺性貝毒（以下、PSP: Paralytic Shellfish Poison）が発生します。ホタテガイの水揚げ期間中は、常に貝毒検査が実施され、それに基づいた厳格な出荷規制によって食品としての安全性が保証されています。しかし、貝毒発生による突発的な出荷規制はホタテガイの計画的な水揚げに大きな支障を及ぼします。これまでの貝毒プランクトン調査や海洋環境モニタリングから、沖合の低温・低塩分水に At が多く存在し、かつ、それが沿岸に接岸した後に PSP が発生することはわかっていましたが、いつ沖合の水が沿岸に流入して PSP が発生するかは不明でした。

▼そこで水産試験場では2002年から、中央水試の海洋環境グループが中心となり、サハリン漁業海洋学研究所と共同研究を実施して、オホーツク海沿岸での「PSP発生メカニズム」を解明しました。また、6、7月のオホーツク海沖合での At 出現調査と稚内-網走間の海面水位差を指標とした宗谷暖流の勢力監視を組み合わせた「貝毒発生予測手法」を開発しました（詳細は次の URL をご覧ください。<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/central/section/kankyau/j12s22000000ud3.html>）。水産試験場ではこの予測手法を活用して、2008年から「オホーツク海貝毒プランクトン速報および宗谷暖流情報」を関係機関へのメール送信やHPへの掲載で提供しています。

▼今年7月の沖合調査では宗谷暖流の外側に At が濃密に分布していることが検知され、宗谷暖流の勢力が一時的に弱まると PSP の毒性値が上昇する恐れがあったことから、6月以降、宗谷暖流の勢力低下が推察された都度、PSP の警戒情報が発信されました。今年は幸いにも、これまで生鮮出荷の自主規制値を上回る毒性値は検出されていませんが、今後も貝毒に係わる情報は随時、「マリネット北海道」の下記 URL に掲載されますので、ホタテガイの計画的な生産・出荷の参考にして頂ければ幸いです。

<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/central/section/kankyau/kaidoku/j12s22000000ddi.html>